18営農技術対策(号外－４)

稲わら有効利用と焼却防止の啓発について

平成１８年１０月２日
北 海 道 農 政 部

1　稲わらの有効利用

水稲収穫後の稲わらは、ほ場に放置せずに、収集し堆肥化してほ場に還元するか、家畜の粗飼料や敷料などへの活用を図る。

また、すき込む場合は秋すき込みとするが、排水不良田では必ず搬出する。

2　稲わらの飼料化に向けて

(1) 収穫・梱包作業

ア　土砂混入を防ぐため、ほ場に凹凸をつくらないように作業機の運行に留意する。

イ　収穫・梱包ロスを少なくするため、稲わらの切断長は15㎝以上にする。

ウ　貯蔵中の変質を避けるため、ほ場内で十分乾燥してから梱包するかラッピングを行う。

(2) 搬出・収納

ア　雨に数回当たったり、品質が劣化したものは敷料等への転用を考慮する。

イ　梱包後、速やかにほ場外へ搬出する。

ウ　収穫物は風通しの良い屋内貯蔵が望ましいが、屋外貯蔵する場合は被覆資材により風雨から守る。

3　稲わらの焼却防止について

収穫後の稲わらの焼却は、大気を汚し健康障害や交通障害（特に、高速道路周辺では警察当局から、ほ場焼却中止の現場指導がなされております。）など生活環境の保全に著しい支障が生じ、地域社会に与える影響が大きく、米産地としての評価低下にもつながるので絶対に行わない。

（平成１８年営農改善指導基本方針抜粋）

稲わらの有効利用

コンバイン収穫後に放置された稲わらは、土壌の乾燥化を遅らせる。わらの鋤き込みは根に障害を引き起こす場合もある。稲わらは収集・堆肥化してほ場に還元することが望ましい。

やむを得ず鋤込む場合は秋鋤込みとする。透排水性良好田では水稲生育への抑制程度は小さいが、透排水性不良田では翌年の初期生育を抑制するだけではなく、登熟を遅らせ収量・品質を低下させる可能性が大きい。わらの連用は、土壌窒素の供給力を高めるので、土壌診断を実施して施肥対応に努める。

口蹄疫の発生防止対策のひとつとして、国内産稲わらの活用が推進されているので、地域内での有効利用を図る。